

私の母は、昭和13年に沼津より田京に嫁いできました。

昭和15年に誕生したのが私です。父はトビ職だったと母から聞かされております。その2年後に弟が生まれ我が家もやっと光が見え始めた2年後、昭和19年…あの赤紙が、30歳でした。私には、この時の母の心中はいかばかりだったろうと。幼い二人の子を母に託す父の思い。

出征の朝だったろうか、我が家の玄関に日の丸の国旗を左、右に組んだその下で、父が私の頭に手をやり満面の笑顔での写真が一枚、この満面の笑顔は一体何を思っていたのでしょうか。私4歳、弟2歳、出征時の写真は全く覚えていない。だから父の面影は想像できない。

そして、1年するかしないかの終戦間近の昭和20年6月5日の戦死公報が。

私の父もそうですが、全国で出征された多くの仲間（同志）、育ちも環境も違う、だがみんな命は一つである。

命って何。私の父も何の為に30年を生きただろう…。

終戦後、昭和20年以降、母は親戚などに世話になりながらも田京の家を何とかやりくりして行きました。

時は流れ、母と一緒に日雇いの作業に行く日もあり、小学校の中頃から母が体調を崩しながらも生計を何とかやりくりしていたからこそ、兄弟二人は元気に育って行きました。それなのに体調すぐれない母の毎日だったと思います。

私が中学校に入った頃には、毎日学校から帰ると母と近くの山の畑に通いました。母に代わり荷物運びの手伝いでした。

昭和29年春、私は父の妹（沼津）の家に預けられた。一人残った弟は、隣に住む小母さんにも面倒を見てもらいました。どうしてかと言いますと、母は体調を崩し国立病院（沼津黄瀬川）に入院中でした。弟は2年間一人で大きな家の何も無い空間に。私は何もしてやれない、弟には。入院中の母に弟は自転車で会いに行った。途中で自転車がパンクしてしまい、丁度仁田の自転車屋さんでパンクの修理をお願いしたところ、無料で修理してくれたと弟からの話でした。弟は2年後東京へ…。

入院中の母は、昭和32年11月2日入院先の病院で永^{なが}のお別れ。

亡くなる前のほんの数分だと思います。母の枕元で私の手を握り締めて、涙流して最後の力を込め私の眼を見つめて別れの言葉が母から…親戚やみんなの言うことをしっかり聞くんですよと、安らかな深い深い眠りの旅立ちでした。私はただ泣くだけでした。

泣き言一つ言わなかった母。優しくった母。

母には何一つしてやれなかった。あと 10 年元気でいてくれたら私たち二人の出発を見せてあげられたのに残念で、残念でなりません。

私からのせめての恩返しは、父と（お父さんと書かせてください）又母との倍の生命を生き、更に命のある限りに。